

プリントNo. 7のガイド①です。このプリントは空欄1～4を理解することがスタートとしてとても重要なので、読みづらいと不評の(と思われる)手書きではなく、Word で作成しました。今回は特に丁寧に学習しましょう。プリントの裏面に答えはありますが、写しただけでは私のように理解の遅い人はすぐにわけがわからなくなってしまうので必ずガイドを参考に、基本をしっかり抑えながらプリントの学習をしましょう。

まず、江戸時代の日本の儒学には大きく3つの系統があることを確かめます。プリントを見てみましょう。「朱子学」、「陽明学」、「古学」です。いずれも、中国・春秋戦国時代の思想家である孔子や孟子・荀子にはじまる儒教の教えを考察するのですが、さてその違いは何でしょう。

◇ まず「朱子学」とは…



12世紀の思想家・朱熹(朱子)が孔子や孟子を教えを解釈した内容が、朱子学となって後世に伝わったもの。プリントの説明を読んでわかる人もいかもしれませんが、上下の身分を重視する内容が支配者に好まれたため、江戸時代には幕府公認の学問とされました。

◇ 次に「陽明学」とは…

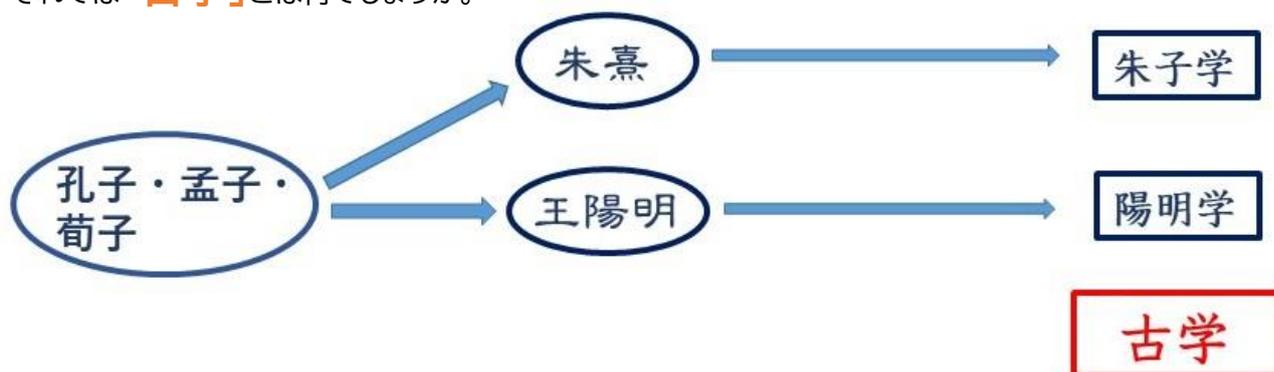


15～16世紀の思想家・王陽明が朱熹の解釈に対して疑問を呈し、異なる解釈を行ったものが陽明学として後世に伝わりました。陽明学の特徴の一つが「知行合一」=「知っているならばそれは必ず行動に表れる」、逆に言うと「行いに表れないのは知っていないからである」、という点です。朱子学があまりにも知を重視していることに対する王陽明の反論といえます。

例えば皆さんのうちの誰かが先生から「勉強時間が少ないではありませんか？」と言われたとします。それに対して「勉強しなければいけないとはわかってはいるんです(/;)。でもついスマホで動画を見てしまって、そのまま眠ってしまうんです(T\_T)。」といいわけをしたとします。それに対して先生が陽明学的に答えると次のようになります。「本当に勉強をしなければいけないとわかっていれば、勉強をするはずです。勉強よりもスマホを触りたいと思っているからスマホをさわるのでしょう？本当にわかっていることは行動に出るはず(知行合一)ですから。」と、バツサリ切り捨てられることでしょう。

この陽明学を学んだ人の中で、小学校、中学校の教科書に登場する有名人が大塩平八郎です。大塩平八郎は大坂町奉行の役人でしたが、大坂が食糧不足に陥っているのは、飢饉のさなかに江戸に米を送らせるという幕府の政策が原因ということがわかっていました。大塩は陽明学を教授もしていましたので、幕府が悪いことを知っていて何もしないという選択はできなかったのでしょうか。このとき大塩がとった行動は **図表 P.202**に書かれています。

◇ それでは「古学」とは何でしょうか。



これが最も名前と実際のイメージを結びつけるのが難しいのではないのでしょうか。結論から言うと、この古学は、朱子学はもちろん陽明学よりも、現実を変革する力をもつ儒学でした。

皆さんが授業を受けるときには、先生の言葉に耳を傾け、それを理解しようとし、それを覚え、試験の時にはそれを答案に正しく書けることで「わかった」と判断しますよね。普通は先生の言うことはそのまま信じるものです。「先生のいうことは本当に正しいのだろうか、誤りはないのだろうか」と疑問を持ち、検証を試みるなどという人は、時間も限られていることもあって存在しないと思われます。

気がつきましたか？「古学」とは、朱熹や王陽明の解釈を信じるのではなく、孔子や孟子・荀子が何といっているのか、原典を読んで自分で確かめようとする学問のことです。



◇ 後世の学者の解釈ではなく、直接原典を読み、真意を理解する。

また、古学の学者は孔子・孟子・荀子が唱えたことは当時の時代背景や当時の言葉遣いで厳密にその意味を理解しなければならないとした上で、江戸時代は孔子の時代とは条件が異なるのであるから、孔子らの思想を時代に合った形で実現しなければならないと考えました。そこでプリントに出てくる学者のように、それまでのしきたりに縛られない新しい考え(たとえば商業活動の奨励)を唱える人物も登場してくることになります。